

浄土

monthly JODO

2/3

2016
February
March

写真家

鬼海弘雄

APA賞特選、日本写真協会新人賞、伊奈信男賞、「写真の会」賞を受賞。

2004年、写真集「PERSONA」で第23回土門拳賞受賞。

写真集

『王たちの肖像：浅草寺境内』矢立出版
1987年

『India』みすず書房 1992年

『や・ちまた：王たちの回廊』みすず書房 1996年

『東京迷路』小学館 1999年

『しあわせ：インド大地の子どもたち』福音館 2001年

『Persona』草思社 2003年

『べるそな』草思社 2005年

『In-between 8 鬼海弘雄 ポルトガル、マルタ』写真・エッセイ 楠本亜紀、菊田樹子企画・編集 EU・ジャパンフェスト日本委員会 2005年

『東京夢譚』草思社 2007年

『Asakusa Portraits』ICP

『アナトリア』クレヴィス 2010年

『東京ポートレイト』クレヴィス 2011年

『世間のひと』筑摩書房 2014年

写文集

『印度や月山』白水社 1999年

『眼と風の記憶 写真をめぐるエッセイ』岩波書店 2012年

『誰をもう少し好きになる日——目めくり忘備録』文藝春秋
2015年

浄土

2016/2・3月号 目次

連載	法然上人のお言葉②⑩	梶村 昇	英訳	河西良治	2
	法然上人の中道思想			友松円諦	4
連載	会いたい人 ドナルド・キーンさん (後)			関 容子	10
連載	響流十方			小村正孝	18
連載	東日本大震災の被災地を訪れて⑩			成田淳教	22
連載	江戸の川を歩く①			森 清鑑	26
連載小説	渡辺海旭⑥⑥			前田和男	34
連載	誌上句会		選者＝	増田河郎子	44
連載	マンガ さっちゃんはネッ			かまちよしろう	47
	編集後記				48



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

ご法語

弥陀如来の本願の名号は、木こり、くさかり、なつみ、みずくみのたぐいごときのもの、内外ともにかけて、一文不通なるが、となうればかならずうまれなんと信じて、真実に欣樂して、つねに念仏申すを最上の機とす。もし智慧をもちて生死をはなるべくば、源空なんぞ聖道門をすててこの浄土門におもむくべき。

(信空上人伝説の詞)

現代語訳―阿弥陀仏の本願の名号というものは、木を切ったり、草を刈ったり、葉つ葉を摘んだり、水を汲んだりしているような者で、仏教にも他の学問にも欠けて、何も分らないが、ただ南無阿弥陀仏と称えれば、必ず極楽に生まれると信じて、心の底から願ひ求め、いつも念仏を申している人を、最上の人と

法然上人のお言葉

Honen Shonin's Sayings

The principal focuses of the nembutsu in Amida Buddha's Original Vow are on people, like those cutting wood, mowing grass, plucking greens or drawing water, who are illiterate for lack of Buddhist and other learnings but earnestly pray to Amida Buddha all the time believing that if they say the nembutsu, they do not fail to be born in the Paradise. If our wisdom itself allowed us to free ourselves from this world of delusion, why should a man like this Genkuu (=Honen) leave the Holy Path Buddhism in Hieizan and come to the Pure Land Buddhism. (*Shinkuu Shonin Densetsu no Kotoba*)

する。もし智慧で迷いの世界を離れることができるのであれば、この源空など、どうして比叡山の聖道門を離れて、浄土門にくるであろうか。

解説

私たちは毎日多くの問題に遭遇します。それをありもしない智慧で、なんとか解決しているつもりですが、この世には、どう智慧を働かせても解決のつかないものがあります。たとえば身近な問題ですが、お互い、今自分の置かれている状況は、みんな自分の智慧で考えてきた通りになっておりましようか。「はい」と答えられる人は、おそらく誰もいないでしょう。みんな思いがけない人生の展開を味わっているものと思います。これから先も同じことだと思えます。

法然上人は比叡山で「智慧第一の法然房」といわれた人です。その上人が「もし智慧ですべてが分かるというなら、私源空は、どうして、それを説いている聖道門を離れて、浄土門にくるだろうか」と述べております。この世は智慧で計り尽くせるものではない、それを超えた大きな力があるということです。とすればそれに随順して生きていくほかないのではないのでしょうか。

Commentary

We encounter a lot of problems every day. We figure we can manage to solve the problems by means of our only imaginary wisdom, but there are problems in this world that, however hard we may try to, we cannot solve by means of our wisdom. To give a familiar example, have all your present situations been managed exactly as you originally planned to by your own wisdom? Perhaps there may be almost no one who can answer in the affirmative. All of you must have tasted unexpected developments of your lives. The same will be true with your futures as well.

Honen was called "Monk Honen of the top rank of wisdom" in Hieizan. That first-rank Honen said, "If we had enough wisdom to understand everything, why should I, Genkuu, leave the Holy Path Buddhism, in which such a precept was preached, and come to the Pure Land Buddhism?" In this world, there is, indeed, an inscrutable greater power beyond human wisdom. If that is the case, what else can we do but live an obedient life following such a greater power?

梶村昇

亜細亜大学名誉教授

アーカイブス●月刊浄土ライブラリ昭和46年10月号

〔原題・法然上人の経済思想〕

法然上人の 中道思想

友松円諦

（東京神田寺主幹―当時）

法然 門下の 経済研究

大正大学の前身宗教大学を卒業した頃というのだから大分昔の話であるが、当時、望月信亨先生が御健在で御指導を頂いていた頃である。私が卒論に選んだものが、こともあろうに、「法然及び門下の経済的研究」というのである。その論文はいまはどこにどう成っていたのか知らぬが、行方不明で却って幸いである。何を材料としたものか、せいぜい、玉葉か、東鑑位を参考にした程度で今から見れば卒論の名にふさわしいものではないと思うけれども、一応、法然上人の私有財産とか、どうやって生きていられたとか、戒をさずけて生活をしていられたことが玉葉に手に取るように出ていたりことや、弟子達の中には禅勝房のように番匠をいとなむもの「作仏房の如く染物なとやうのものを売買して命をつくはかりごととしけり」(勅伝二〇)というような材料を出した記憶がある。処が何しろ、貧弱な私の卒論である。先生のお氣に入らぬのは当然であつた。さてそれから何年たつてからであろう。昭和七年「仏教経済思想研究」第一巻が出来たとき、欧州留学から帰朝の御挨拶もかねてうかがつたところ、今度は先生の方から破顔一笑、「寺院所有の問題」を御覧になって、「これこそ、学問である」とおほめをいただいたのである。これから書くようにする法然上人の経済思想もただ勅修御伝にどう出ているというだけでは望月先生の印可がいただけない筈である。一応、仏教そのものに於ける衣食の立場というものを吟味して法然上人のとられた独自性というものを考えて見たいと思う。

釈尊の 中道思想

仏教の中から経済思想をたぐり出そうとするには、どうしても、一応、釈尊の中道思想を辿らねばならぬ。これが水源である。「一切衆生はみな食に由りてその生命を存す、食ありて便を存し、食なければ便を失ふ」(1)とは原始經典にくりかえす処、出曜經(2)にも「食に非れば生命は救はれず。何れか能く揣食せざらん。それ食を立つるを先きとなす、然して後、乃ち道に至るなり」の一句を詳細に説明している。この合理的にして常識的な聖句は空海の性靈集にも見るところである。この聖句は若き釈尊の修行時代、とくに、その苦行生活を清算して、初めて中道に目ざめられた体験からにじみ出た言葉であろう。仏伝の記録する処によれば、若き釈尊はその初め苦行こそ出離の道なるべしと信じて、つとめて肉体を苦しめんとて日に一麻一米を口にし六年に及んだのである。しかし、かくして得たるものは唯肉体の衰弱と疲労のみであった。かくてその非を語って一人の村女の供養せる乳糜を口にせられた(3)。かくして、次の如き体験をえられた。「げに、われはかの苦行より離れぬ、げにわれは甲斐もなき苦行より離れたるは善きかな、不死を願ふいかなる苦行もすべてかひなきことなりとわれは知れぬ。陸舟の舵の如くすべて得ることなるべし(4)」ただ肉体を苦しめること自体が何かの宗教的功德になるという当時の極端な、不合理の宗教思想に抵抗されたところに釈尊の中道思想の特色が

あつた。

1 増一阿会含経（大正二、五六五、a）

2 出曜経二三（大正四、七三四）

3 “ 七

4 相応部一ノ一

こうした中道思想の出現があつてこそ、そこに極端な苦行主義、禁慾主義、ひいては、人間性の滅却というところまで行かずにすんだのである。後年、釈尊教団を一時的にせよ、分裂の危機に陥し入らしめた提婆達多の言行なども、「比丘らを終生林住者たらしめ、村里に入ることなからしめ、終生乞食者たらしめ、招待をうくることなからしめ、終生糞掃衣者たらしめ、居士の施す衣服をうくることなからしめ、終生樹下住者たらしめ、屋根ある家に入ることなからしめ、終生魚肉な嚼ふことなからしめよ」との主張も釈尊のおだやかなものに対して極めて激しい一方的のものであつたところに、禁慾主義がただよつていたのである。釈尊はこの点について余りやかましい制限を加えていられなかつたようである。処が、提婆の徒は法顯、玄奘入竺当時のインドに於ても一部の寺院に於ては提婆の伝統を守るものが残つていて彼らは、釈迦文化を礼せず、乳酪をのまなかつたことを記録しているほどである。そこに彼らが中道思想を見失つていることに気づくのである。

法然上人 と中道思想

法然上人が並々ならぬ学者であられたことは諸伝の等しく記録する処であるが一つ中道思想にかぎって考えてみても、各宗の祖師方を通じて、これほど、中道というものを自分のものにされている方はあるまいと、私は考えている。たとえば提婆がここで問題にしている魚肉の問題にしてからが、正統仏教律に

於ても「見聞疑」の三不淨をさけることを条件としてこれを許しているのである。法然上人にいたっては、さらに一步をつき破ってこういつている。「又人々後世の事申けるつゝ、に、往生は魚食せぬものこそすれといふ人あり。とかく論じけるを、上人きき玉て、魚をくふもの 往生をせんには麴ぞせんずる。魚くはぬもの、せんには猿ぞせんずる。くふにもよらず、くはぬにもよらず、ただ念仏申もの往生はするとぞ、源空は知りたるとぞ仰られける（勅修御伝翼賛廿一）全く一刀両断である。しかも、そこにはウィットとユーモアさえただよっている。魚を食う、食わぬ、そんな末梢の処に力を入れる必要はない。中心は仏道にある。もっとはつきり中道を示していたのは次の一句である。「歌よむは罪にて候か。答、あながちに得候はじ。但罪ともなり、功德ともなる」簡にして実に要を得ている。中道の核心をついているといえる。当時、「歌」といえば、相聞、恋愛のうたにきまっていたのである。先づ一般に仏道のさわりになるものと思われていたであらうのに。法然上人はすべてそうした偏見から離れて、功德と罪の二辺から離れて、是を是とし、非を非とせられ、歌によつては、功德の歌ともなり、罪の歌とも成ると答えている。歌そのものは二辺をのりこえている中道であることを明らかにしていられる。

所知所領も 念仏の助業

「現世をばいかかはからひ候べきと、上人の玉はく。現世のすぐべきやうは念仏の申されんかたによりてすぐべし。念仏のさはりにならぬべからん事をばいとひすつべし。一所にて申されずば修行して申すべし。修行して申されずば一所にて申すべし。ひじりにて申されずば在家になりて申すべし、在家にて申されずば遁世して申すべし、ひとりこもりて申されずば同行と共行して申すべし、共行して申されずば、一人こもりて申すべし、衣食かなわずして申されずば他人に助けられて申すべし。他人の助けにて申されずば自力にて申すべし。妻子も従類も自身たすけられて念仏申さんためなり。念仏のさはりになるべくはゆめゆめもつべからず。所知所領も念仏の助業ならば大切なり。妨げにならばもつべからず」(勅修御伝四十五) この一文によつて明らかであるように、上人にとつて、一所に止住するのも、修行するも、在家するも、出家するも、妻帯するも、せぬも、遁世するも、同行と共行するも、衣食を他人にたのむも、自力でまかなうも、妻子従類の助けをうけるか、うけぬかも、所知所領をどうすかも、自分の念仏生活の妨げになるか、ならぬかが中心である。もし、少しでも妨げになるのなら妻もめとらぬがいいし、遁世するもいいし、遁世せぬもいいし、中心は自分の仏道次第である。衣食とか、経済とかいうことは二の次ぎであるというのが法然上人のお考えのようである。道心あるところおのづから衣食ありときいている。法輪転ずるところ、食輪転ずるとかや、念仏の声するところ、いづれや、衣食の伴わむところやある。私はそう信じている。

連 載

会いたい人 関 容子

特別編

ドナルド・キーンさん 後



ドナルド・キーンさんと関容子さん。

キーンさんから古浄瑠璃『弘知法印御伝記』の載った古典文庫を手渡された上原誠己さんは、その角書に「越後国柏崎」とあるのを見て、強く惹きつけられる。新潟に飛んで帰ると、さっそく佐渡にいる人形遣いの西橋八郎兵衛さんに復活上演の夢を熱く語りかけた。

この西橋さんの早大時代の恩師が鳥越文藏教授、というのも何やら深い因縁を感じるが、早稲田の演劇科在籍中に観た人形浄瑠璃に深く魅了されて、大学を中退。文楽人形遣いの吉田簀助師に入門して養司を名乗っていたが、あるときから佐渡の素朴な一人遣いの文楽人形に心を奪われ、その地に住みついた。同じく文楽三味線の鶴澤重造師に弟子入りして浅造を名乗っていた上原さんは西橋さんの二年後輩に当り、つまり二人は文楽時代からの盟友。

しかし復活上演の試演会にこぎつけるまでには二年近い歳月を要した。まず上原さんと

西橋さんは濁点のない仮名と漢字混りで難解な古浄瑠璃の文章を読み解くことに腐心する。たとえばこんなところ。

「なむさんほう 大かめ一足とび来り みとり子をかいくわへ」は、南無三宝、狼一匹跳び来り、嬰兒をかいくわえ……ということになるのだが、二人は初め、なぜ山中に大きな亀が出てくるのか、と悩んだという笑える話もあった。そして読解がすむと、今度は節作りにとりかかる。譜面などまったくない、無からの出発だが、幸い古風な雰囲気は湛えた文楽節や説経節の音源は残されている。上原さんはそれを丹念に採譜し、特徴をつかんで作曲、ついに古浄瑠璃全六段を甦らせた。

一方の西橋さんは、四十体にも及ぶ人形の首を彫り、衣裳や舞台装置の製作に取り組みながら、あれこれ演出プランを練る。また、人形の遣い手たちを一般公募して、復活上演のための「越後猿八座」を結成。

この「猿八」というのは西橋さんの住む佐渡の地名で、座員の芸名は男性には「猿」、女性には「八」の字を——猿五^{えんご}とか八桐^{やぎり}とかつけるのだが、中で異色なのは足の怪我でバレーナの道を諦めたフランス女性、八里^{やさと}さんの存在だろう。佐渡の老若男女に混じって西橋さんの懇切でかつ厳しい指導を受けている姿がテレビのドキュメント番組に映し出されていた。

着々と準備が整い、まずは廃校になった佐渡の小学校で公開舞台稽古が行われる。幕が閉った途端、一同が抱き合って涙し、ある女性出演者は「これまでの暮しの中で、こんな泣くような激しい気持があつただろうか」と感激の面持ちだった。

番組の中のキーンさんの感想。

「文楽は三人遣いで動きが遅いですが、こちらは一入遣いで、人形の動きが速くなります。話自体も日本で最初の即身仏の話で、これも

大変珍しい。古くて新鮮という感じで、非常に面白かったです」

さすがにユニークで鋭い視点だ。

『越後国柏崎 弘知法印御伝記』の復活初演は平成21年6月、由縁の地柏崎（産業文化会館ホール）だった。その評判を人づてに聞き、私が観せていただいたのはその年の九月末、新潟市の得生院^{とくしょういん}本堂で行われた公演。

鶴澤浅造こと上原さんは、キーンさんから新たに名づけられた「越後角太夫^{かくたゆう}」の芸名で、長時間に及ぶ弾き語りを全段一人で演じ切った。また、西橋さんの率いる越後猿八座々員十七名の息の合った熱演もみごとなものだった。

浄瑠璃の荒筋を紹介する。

越後の長者の息子弘友^{ひろとも}が柏崎の遊郭で喧嘩騒動を起し、夫の身を案じて探しに来た妻の柳の前は馬子に斬り殺される。このとき胎内

から生まれ出た水子を、仏の化身である狼がくわえ去る。愚行を悔いた弘友が弘法大師に出会い、発心して修行をするが、美女に化けた魔王にさんざん防げを受ける。この場面が何とも愉快だった。

「弘知少しも騒がず 持ったる数珠を打つけ給えば 般若の利剣となりて切払えば 魔王はかなわず げに有難き法力とて 虚空に上があれば 利剣は元の数珠となり 弘知の御手に返りけり……」

棒の先につけた数珠がクルリと返ってたちまち利剣に変わり、また数珠に戻って弘知の元に飛んでくる。

見物はすっかり昔気分でヤンヤの大喝采。ここで休憩となる。興奮しながら別室に移動したお客たちは、ブルボン提供のお茶とお菓子でみんな元氣を取り戻す。

そして後半、柳の前の靈魂も成仏し、弘知は仏法僧の鳴き声を聞いて忽然と悟りを開

き、即身仏となる決意を固める……。

浄瑠璃は一字一句変えずに元のまま語られたが、観客は「大かめ」と聞いても舞台に「狼」が登場すればすんなり理解できて大満足だ。しかしたった一か所、上原さんは効果的な変更を施す。それは終段。

「仁和七年九月三日 弘知法印往生有て 貞享二年まで八百五年……というのを、「平成二十一年まで一千一百二十九年」として、「今に越後国柏崎の近所に 御影みえいつつがなし前代未聞 有難し」と続けたことだった。

客席は「平成」と耳にしたあたりで最高に盛り上がり、拍手は長く鳴りやまない。私も拍手しながら、芭蕉が寺泊さいしやうじの西生寺さいしやうじにこの即身仏を訪ねた、と曾良の随行日記にあったのを思い浮かべ、長い長い時の流れに思いを馳せた。公演は大成功だった。

キーンさんはこの公演があった翌年六月、

めでたく米寿を迎えた。「文藝春秋」巻頭随筆にキーンさんはこう書く。

「米寿という節目もニューヨークでは意味を持たず、したがってこの大事な誕生日も素通里される。しかし東京では随分前から大勢の友人、知人が主催者となって、目出たい日にふさわしい宴を盛り上げようと数々の準備をしてくれた」(平成23年2月特別号)

日本という国は情があつてつくづくいい、と思つてくれているのがよくわかつて、嬉しくなる。

「さて、パーティーの山場は友人の越後角太夫(上原誠己)の語りだった。『弘知法印御伝記』という古浄瑠璃を一人で語り、唄っただけではなく、同時に三味線の伴奏を弾いたのである。声は強く、音楽的であつた。時間の制限があつたために、この日は一部しか披露されなかったが、後日、浜離宮朝日ホールで越後猿八座の人形遣いの方々と一緒に全

曲を語る機会に恵まれ、その際は抜粋でも聴衆に深い感銘を与えた」

朝日ホールでの東京公演は平成22年10月。キーンさんが実行委員長を務め、大成功をおさめている。

さて、「米寿」と題した巻頭随筆はこう結ばれる。

「八十八歳ともなれば、友達の多くはこの世にはおらず、何年ぶりに会つた友人と昔を思い出して、明るい話ではない。誰それがいけないのは残念ですね、と語り合い、或は口に出さずとも出席できなかった人々を心から思う。これが古浄瑠璃のペースとびつたり調和するのだ。アリストテレスが書いたように、悲劇を見ることによって、自分の中にある哀れみと恐怖を一掃できるのだろう。また、忘れられていた浄瑠璃が見事に蘇つたことも、芸術の永遠性を具現したと言える。おかげさまで大変、後味の良いパーティーだった。次

は卒寿ということだろうか」

このあたりからキーンさんと誠己さんの間には強い信頼関係が築き上げられ、「次は卒寿」というほのかに明るいつ未来への期待はみごとに適中して、卒寿の誕生パーティーで誠己さんは正式に養子として披露された。キーンさんはこれに先立つ三月に、日本国籍を取得している。

ドナルド・キーン・センター・柏崎開館2周年記念の講演会（平成27年9月）に私が招かれて親しく昼の会食に同席させていただいたとき、誠己さんはごく自然に「お父さん」と呼び、「これはもう召し上がりませんね。こちらに下げてよろしいですか」という問いかけに「ゆるるゝすつ」と、お茶目に答える光景は、老境の孤独とは程遠いものだった。

思えばキーンさんが十八歳のとき、タイムズスクエアの本屋でアーサー・ウェーリ訳の

『源氏物語』を買い求め、「夢のように魅惑的で、どこか遠くの美しい世界」（『ドナルド・キーン自伝』）に心を奪われて以来、実に七十有余年の歳月をひたすら日本文学研究と世界への紹介に費してくれた大恩人に、これは誠己さんが日本人を代表して報いている姿なのだった。

キーンさんは、東日本大震災（平成23年3月）による東北のあまりの惨状に深く心を傷め、日本に帰化する決意を表明する。

これは『日本人の戦争』を出版（平成21年）した際、高見順の日記に空襲の罹災者たちの姿を見て、「いとしさ、愛情で胸がいっぱいだった。この人たちと共に生き、共に死にたい」とあつたのに心を動かされての決心だった。

ここにもう一人、日本人としてその厚情に報いたい、と考え、行動に移した人がある。

ブルボン吉田記念財団代表で、のちにドナルド・キーン・センター柏崎を設立した吉田康社長が語る。

「3・11のすぐあと、四月に先生はコロンビア大学を退任して、最終講義のためにニューヨークに行かれました。その後日本に永住するので向うのお宅を引き払わなくてはならない。引越しのお手伝いをしますよ、蔵書の収納も大変でしょうから、柏崎ならスペースがありますよ、と申し出ました。そのころ古い旅館を入手していて、先代社長が非常な読書家だったのでその本の保管のために使おうかと思っていたんですが、日本文学の大恩人への感謝を誰かが何かの形で表わさなければ、という気持ちから、先生の今後の活動の拠点としてこの建物を生かそうと思いつきました。先生、柏崎にドナルド・キーン記念館を造りましょう、と意気こんだら、吉田さん、記念館は『メモリアル』のことで、わたしはまだ

生きていますから『センター』がいいでしょう、って（笑）。それでこの古い建物をすっかり改装して、ニューヨークの先生の書齋そのままの形で再現しました。窓からは光るハドソン川の流れを眺められる仕掛けがしてあって、本も前と同じに並んで、先生のお父さんが貿易商で中国から取り寄せてあちこち旅した絨毯も、今はちゃんと居場所に落ちついて……先生がそこで寛いでいらつしやる姿を見るのは、幸せです」

ここでふと、長岡出身の大詩人でその晩年に私が警咳に接した堀口大學先生の「遠き悪人」という詩の一節が思い浮んだ。

「神さまは二人の愛のために 戦争をお望みになったのだ」と。こんな風にすべてのものが——カイゼルの始めたあの戦争までが——二人の愛の為に都合がよかったのだ……」（大學先生の恋の相手は画家のマリー・ローランサン）。

戦争や津波という大災害をもたらす魔王も、やり過ぎを悔いて何らかの「お釣り」を出す。それはキーンさんが日本人になる決意であり、よきご養子であり、キーン・センター柏崎なのだろう。

読書家だったブルボン先代社長の愛娘、吉田眞理さんは、キーン・センター設立の計画段階から、地元新潟産業大学に二年半通って、学芸員の資格を取った。眞理さんが言う。

「キーン先生と柏崎の御縁を結んでくださった古浄瑠璃のモデルは今も実在する即身仏、弘智法印（浄瑠璃では弘知）で、辞世の歌があるんです。

岩坂の 主は誰ぞと 人間わば 墨絵に書きし 松風の音

良寛さまは、この辞世の歌に接して、実際に即身仏にもお参りなさって、七言絶句も詠んでおられますけど、私が大好きな『無心』

という良寛さまの漢詩があります。

花 無心にして蝶を招き 蝶 無心にして花を尋ぬ 花 開く時 蝶来り 蝶来る時 花開く……

まだこの詩は続くんですが、白い蝶であるキーン先生が、日本人の心の優しさを象徴するような白牡丹に、あるときは静かに寄り添ったり、また無心にヒラヒラと戯れて飛んだら……まさにそのイメージで、私はこの情景を思い浮べると、自然に涙が溢れるんです」
本当にいい人たちばかりですがすがしい。
(この項おわり)

※長期にわたるこの連載から『女優であること』『再会の手帖』『舞台の神に愛された男たち』、そして近々その続篇が出ますが、四冊の単行本が生まれました。今回で最終回となります。ご愛読ありがとうございました。

現世をいのるに、しるしなしと申す事、仏の御そらごとには候わず。わが心の説のごとくせぬによりて、しるしなき事は候なり。さればよくするにはみなしるしは候なり。観音を念ずるにも、一心にすればしるし候。もし一心なければしるし候わず。

（法然上人『百四十五箇条問答』）

この世でよりよく生きられるよう祈ったにもかかわらず、そのご利益がないというのは、仏さまが嘘をついているわけではありません。

その人自身の心が仏さまの教えにそぐわないから、ご利益がないのでしょうか。教えのとおりになれば、ご利益はあるものです。

観音菩薩にも、念いを一心に祈ればご利益はいただけますし、一心でなければいただけません。

いまどきの流行り

世は御朱印ブームだそうである。年明け、ラジオの連続番組で扱っていたのをたまたま聴いて知った。出演していた仏教系大学の教授は「空前の」という最上級の形容詞で伝えていた。いつ、どのような調査をしながらの「空前」なのかよくわからないが、仏閣神社にお詣りする人が増えているという点は、それはそれとして大いに歓迎すべきである。寺社によっては、御朱印を希望する人が従来の十倍にもなったというから、驚かないわけにはいかない。

寺社参拝＋御朱印といえば、どちらかといえば高齢の方の菩提寺団参旅行や霊場巡りツアー、というのが従来の図式であったように思う。それがいまは「若」が「老」を凌ぐ勢いだというのだ。自称「御朱印ガール」も少なくないとか。「○○ガール」は、あらゆるジャンルに、なおもって増殖中のようなのである。

御朱印の歴史は平安時代にまで遡る。写経をし、寺院に納める際、その証として授かったのがそもそもだ。それが江戸時代頃になると、納経をしなくとも参拝したのみで、「証明書」として授与されるようになり、現代に至るという。「納経の際」であるから、元来は寺院におけるものだったが、後に神社でも取り入れられるようになったらしい。

そういえば：筆者も学生の頃、御朱印帳を手と同級生と法然上人二十五霊場

巡りをしたことを思い出した。「した」と言っても成満したわけではない。近畿、中国、四国と広範にわたるため、一度にはとても無理だ。そこで数年かける計画としたのだが、結局、筆者は初回しか参加できず頓挫した。その後、仕事（取材）ですべて詣ることができた（と思う。たしか…）が、御朱印帳は持参しなかった。正直なところ、筆者には御朱印に対してあまりこだわりはない。なぜいま、御朱印ブームなのか。少し調べてみた。手っ取り早く、インターネットを開く。

「超かわいい!」「アートのステイック!」「社寺ごとのオリジナリティが魅力」といった文言が乱れ飛んでいる。御朱印フリークによるブログ、「御朱印人気ランキング」なるホームページまである。「同じ寺社でも書いてくださる僧侶、神主によって味（筆跡、書き癖）が違って、それがいい」ともある。マニアック過ぎる！（笑）。きっと陰では、上手い下手まで沙汰されているのだろうかと考えたら、驚きを通り越して恐ろしくなった。御朱印帳もかつての無骨シンブルなものから、かわいらしいデザインへと変わっている。知らない間にファッションシーグズへと進化（？）していた。

気になったのは、散見される「御朱印集め」という表現だ。それぞれの仏閣

寺社に対する信仰的な記載はとくに見られず、御朱印そのものに対する感想、批評が多い。参詣した証に授かる、というより、入手のためにそこに行く、というニュアンスだ。本堂や拝殿でお詣りしているのかどうかあやしい雰囲気すらある。彼ら彼女らは、参詣者というよりコレクターということなのか――。

一方で好感がもてたのは、参拝や御朱印をいただく際の作法や礼儀について注意を促すページがあったことだ。とりあえず、ホツとする思いがした。

ブームの背景には、観光地などで定められたコースを巡り、訪れたポイントでスタンプを押してもらうスタンプラリー――御朱印をこれとダブらせる向きでもあるのだろうか。それが好ましいかどうかはさておくが、いずれにしろ大切な仏縁には相違ないだろう。“いまどきの仏縁の結び方”として、仏さまには寛容にみていただくことでしょうか。ただし、まずは掌を合わせ、ちゃんとお詣りすることだけは、切に願いたい。

ラジオで教授は「このブームは単なる一過性のものではない」と力強く締めくくっていた。永続しないのを性とするのがブームという気がするのだが……まあ、いいか。少しでも長く続いて、一人でも多くの方が仏縁を結ばれ、ご加護をいただくことができますように。

(小村 正孝)

東日本

大震災被災地を訪れて 10 の

成田淳教

東京世田谷感応寺住職
関東フロック浄土宗青年会理事長



毎年おこなわれている大本山増上寺御忌での「ふれあい物産展」（東北被災3県の物産展）。

東日本大震災被災地の現状について一年間の連載でしたが、途中、関東・東北豪雨などもあり、災害関係ということで範囲を広げて書かせていただきました。

東日本大震災以降、浄土宗東京教区青年会活動の一環として、災害に関わるようになりましたが、私自身はそれ以前は災害ボランティアに対して熱心ではありませんでした。東日本大震災後の惨状を各地で見、被災された方々のお話を伺う中で、災害時に助け合う意識、あるいは、自分自身の事として向き合うという意識が起きました。

被災地の方々がよく「とにかく来てほしい」と仰いますが、映像や音声だけではなく五感と心を含めた六根すべての対象としての災害の痕を感じることで、私自身が大きく災害に対する意識と復興に対する思いが起こったことから、現地に行くという事には大きな意味があるように思います。

一面の津波の流出物や壊れた建物を見て、

ヘドロや可燃物を其処此処で焼く煙と埃の臭いを嗅ぎ、重機が動く音を聞き、ゴム手袋をはめて元の地面とその上に積もったヘドロの隙間を探しながら掻き出し、砂をネコ車で運び、時には弁当の蓋を開けると蠅が集るのでパンの袋を開けたところに口を突っ込んで昼食を済ませたり、被災者の方々と食事やお茶を共にしながらお話をしたり、イベントを行って、キャンドルを一緒に作ったり、一諸にお経をおとなえしたりと、現地の方々と各地から支援に入る方々といろいろな活動をしてきました。

当初の惨状から片付けを行い、仮設住宅などに伺うようになり、家を新築されたお話や復興住宅に移る話を伺ったりと、一步一步の復興への過程を見てきました。先日、初めに作業に関わらせて頂いた仙台市若林区照徳寺様の別院が上棟式をされたと聞き、とても嬉しく思いました。

私の場合は、自分と同じく全国浄土宗青年会という会に所属している会員が被災した、同じ浄土宗の寺院やその檀信徒が被災した、同じ宗教としての仏教寺院やその檀信徒が被災した、同じ日本人が被災したというように、活動の内容や対象とする人々により自分と同じということを意識して諸活動にあたっていますし、そのように自分のことと常に意識することで継続できるように感じています。

関東・東北豪雨による常総市の被災地区に伺った際も、その惨状や埃の臭いが東日本大震災の被災後の状況と重なって、避難所へ伺ったり、個人住宅の片付けのお手伝いをした時もそうした意識を持ちながら、自分ができし事をしてきました。

災害ボランティアに限らず、日常のことでも同じ意識を持つように心掛け、五感で関わり、心で感じ取ることがとても重要であると実感しています。

まもなく震災から五年、私は今のところ、

今年の三月十一日は岩手県の釜石市で行われる全日本仏教青年会の追悼法要に参加する予定です。三月十一日前後にはおそらく各所で法要や追悼式典が行われることと思います。また昨年記事にも書かせて頂いたように仙台市ではアーケードなどで黙祷のアナウンスが流れるかもしれません。

被災地に行かれる方は、そうした法要や行事に参列して追悼の想いを為し復興を祈っていただければと思います。

災害から五年とか、来年の七回忌とかの区切りを以て活動を切り上げるということの無いように、そうした区切りの時だからこそ改めて今何が求められているか、これから何が



求められるのかを考え、或いは現地の方に聞き、復興に向けて今後の活動を考えていければと思います。

一年間の連載を終えるに当たりこの誌面をお借りして、記事に書かせて頂いた関係の方々、お話を伺わせて頂いた方々、関係の各位、一年間お読み頂いた方々に御礼を申し上げます。

なりた じゅんきょう 東京教区玉川組 感応寺住職
昭和50年1月、世田谷大吉寺に生れる。平成13年より感応寺住職
平成22年浄土宗東京教区青年会会長。平成24年東京浄土災害対策委員長
平成26年関東ブロック浄土宗青年会理事長（現職）



津波の被害を受けた直後の照徳寺墓地。



鬼怒川が氾濫して被害を受けた常総市。

江戸の川を
を歩く

第二回

森清鑑

江戸は川の町

江戸は、「百歩、歩けば川に当たる」と云われたほどの川の町である。今の銀座界限は、東洋のヴェニスと形容されたほど水に縁の深い場所であった。江戸には大城郭を守る深堀、運河、灌漑水、上水、など大小様々な河川が流れている。天然の川の流れを変え、運河を造ること七十年。川は、庶民の生活に潤いを与え、経済活動のルートとなり、遊興の場も提供している。江戸の場合、川、堀、運河の造成は、都市造りの基本。それらは、洪水防禦、軍事的防衛手段としても考慮されている。

江戸の地勢—東京湾の変遷

江戸の川を語る前に、東京湾の過去の変遷について述べてみよう。東京湾は、生きている。万年周期で海進、海退を繰り返している。温暖化の時には、水位が上がり海進。つまり

海は陸に向かって広がって、寒冷期には、水位が下がり、海退し、陸が現れてくる。

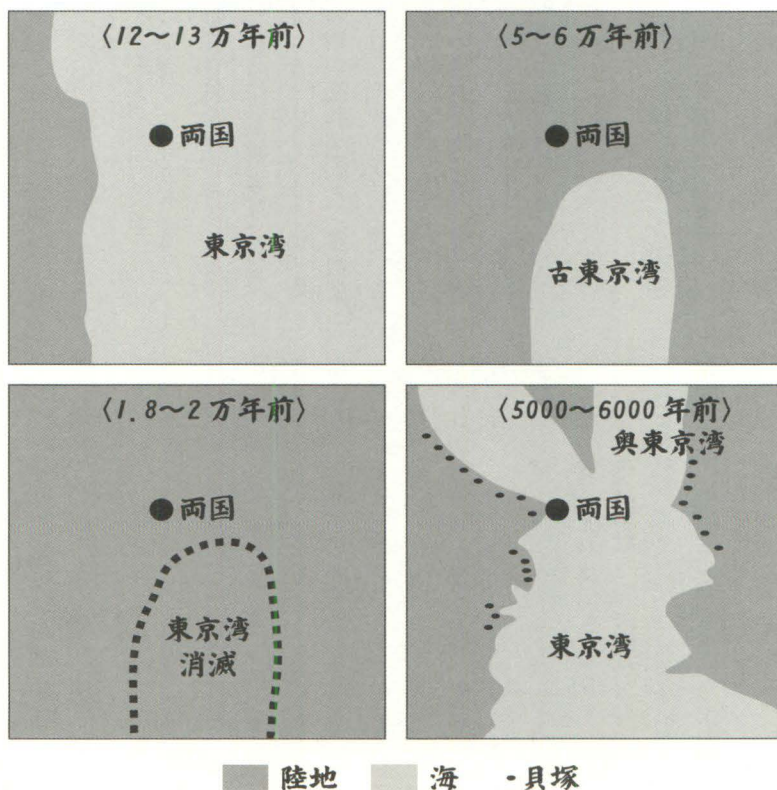
◎十万年前

温暖期の、今から十万年前には、関東平野は、ほとんど浅い海。無論、江戸一带は、海の底であった。東京湾は埼玉の先まで広がり、関東の陸地は、まるで海に浮かぶ島繋ぎの様。房総も、三浦半島も細い島を感じさせる。この時、江東区「両国」は、海の只中にある。

◎五万年—二万年前

これが寒冷化（最終氷期）を迎えた五—六万年前だと、今度は、海退期で海は引き、海面の高さは、現在よりも下がり、平野は陸地化。扇状地が形成され、「両国」は完全に陸地の上。東京湾はうんと縮小され、いわゆる小さな古東京湾と呼ばれるようになる。この傾向がずっと続き、今から二万年前には、寒冷化は、頂点に達し、この時、海面は現在より百メートル以上も低くなり、東京湾は消滅

江戸周辺の地勢の変化 —東京湾の変貌—



し、陸地と化する。

◎縄文期（五千前から）

その後は、次第に温暖化となり、再び東京湾は、海進期を迎える。人々が棲みついた全盛期、つまり、縄文前期（五千～六千年前）には、再び温暖化の波に乗って、東京湾は海進する。海の水位は、現在より数メートルも上昇し、陸地をのみ込み、いわば、関東平野全域、埼玉県の北まで、大小の入り江となつて、入り込んでいる。そして、いわゆる、奥東京湾を形成するようになる。この時、東京湾も拡大し、「両国」の処は再び、海の底（陸地沿い）に沈んでいる。

この期、つまり縄文時代の海岸線を知るには、縄文人が残した無数の貝塚を繋げれば良い。発見された貝塚は、点々と埼玉の奥地にまで広がっている。そして、縄文後期から再び海退現象が始まり、関東北まで入り込んだ湾は、徐々に、ギザギザの入り江状となり、

陸地化。現在の東京湾に近い形となる。

東京湾の海退にともなつて陸地が、広がり、加えて、富士山、箱根山を初めとする、活火山の噴火が長い間続く。降り積もった火山灰と若干の隆地が台地を形成する。そして、あちこちから、水の流れが広がった湿地低地に向かい、つまり川となつて東京湾に注ぐようになる。当初、東京湾に注ぐ、川の流れは、急峻である。そのため、流れは、台地を削り、谷を造ることになる。押し流された土砂は、東京湾に流れ込み、さらに州を形成し、さらに陸地は、広がって行く。

縄文人の生活環境

この地勢の変化に従つて、人の営みを見ると、現在の東京都にあたる地域に人がやつてきたのは、約三万年前の旧石器時代。そして、縄文時代には、人々は、魚介類が豊富に獲れる海岸沿い、あるいは河川沿いの入り江に沿

つて暮らし、ある意味で安定した、定住生活を営む。例えば、目黒川が国道二四六号線と接する池尻大橋近くに縄文公園がある。そこに描かれている縄文人の生活風景。家宅が再現され、当時の人々の生活を描く。切り立つ崖下は海で、波が洗っている。小舟が浮かび、人々は魚介類を獲る。彼等のはるか後方では、火山が噴火している。また、今の京浜東北線は、正に縄文時の海岸線を示し、北に向かって線沿いに、多数の貝塚が発見されている。有名な大森貝塚から、浦和の先まで。京浜東北線のラインは、崖でその先は海だったのである。ちなみに、現在の皇居は、この時、海岸縁（後の日比谷入り江）に位置している。縄文期の江戸周囲の状況。藤沢、茅ヶ崎、平塚辺りは、すっぱり海の下。多摩丘陵を挟んで海水は青梅まで達し、埼玉の大宮台地は取り残された島状を呈し、埼玉県の久喜一帯も概ね海。入り江はさらに北まで広がっている。

る。房総半島は細長く、茨城は大半が海と言って良く、複雑に入り組んだ入り江が土浦から栃木に向かって伸びている。

しかし、縄文後期からの海退が始まると漁労活動が大打撃を受け、噴火の影響もあり、人口は次第に減る。南関東は、特に縄文文化が栄えた処。したがって、水稻耕作と鉄器使用を骨子とする弥生文化は、西南地域より大幅に遅れ、弥生中期の後半、紀元一世紀頃になつて初めて、本格的な農耕社会が成立する。

台地、谷、川の関係

江戸の中心は、武蔵野台地。その下部が、山の手台地。概ねJ R山手線に囲まれた台地で、五つから成り、各台地間に急峻な水が流れ、台地を削り、谷を造って、谷底を湾に向かつて、川は流れる。具体的には、「上野台地」と「本郷台地」の間に谷田川・石神井川、本郷台地と目白台地の間に小石川が流れてい

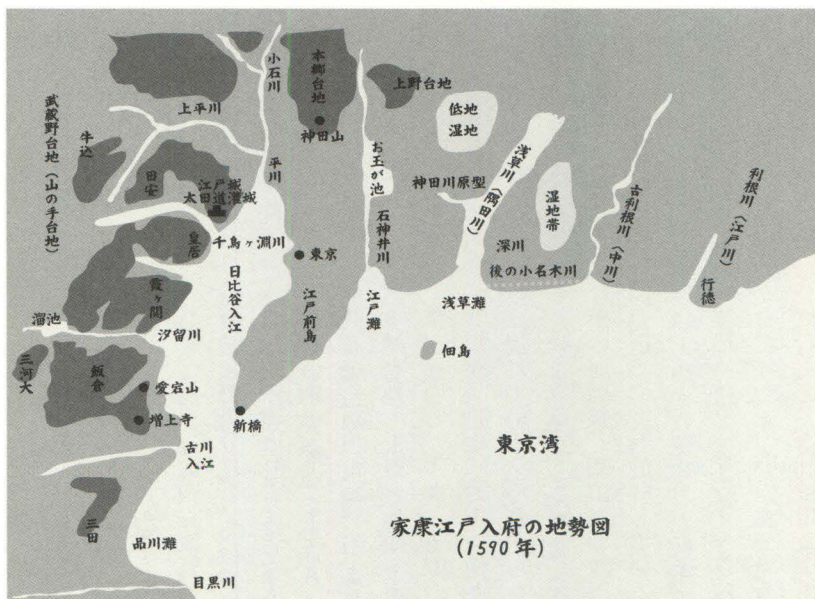
るといった案配である。江戸は坂が多い。これは、台地と谷の境目部分の残滓でもある。武蔵野台地と云ってもそれほど高くはなく、三十〜百五十メートル。急峻な川は土砂を運び、州を形成し、次第に湿地帯の陸地を広げていく。こうした地勢の上に、大都市、江戸が、誕生するのである。

家康、江戸入府

家康が入府した一五九〇年、江戸の地勢はどのようなになっていたのであろうか。まず、海岸線。東京湾は現在よりずっと内陸に食い込んでいる。中央に島が突出。これを江戸前島という。今の東京駅から新橋までの島。当然ながら、左右は海で、この島の左が日比谷入り江。右側が江戸湊。

日比谷入り江の北端に、平川が流れ込む（一橋の処）。そこから、日比谷入り江を品川に向かって海岸沿いに降りて行く。まず、後

の江戸城一帯を割って入る、千鳥ヶ淵川の河口に小さな入り江。ついで霞ヶ関低台地の下、江戸期の溜池と繋がる汐留川河口入り江。そして、増上寺の南を流れる古川の、大きく挟り込んだ入り江。さらに南に立会川の入り江。目黒川が流れ込む大きな入り江、品川湊。武蔵野台地は、幾つにも別れて襞状に南に展開。武蔵野台地の東端、つまり、江戸前島の上、本郷台地・上野台地から東全域は低地・湿地帯が連なる。本郷と上野台地の間には、石神井川が、途中、お玉ヶ池とつながり、江戸湊に流れている。それからさらに東は、自然堤防により陸化した低地（浅草）。そして隅田川の河口域。隅田川の河口域は、今より川幅が広く、少し蛇行している。この川の東側には、州から陸化した低湿地が広がる（両国、深川一帯）。そのずっと南に、海の孤島のようにはつんと浮かんでいる、佃島。さらに東に行くと、古利根川（中川）や、利根川（江



月刊浄土
通巻900号
奉賀

智香寺住職

枡川聖業

〒112-0012 文京区大塚三・二八・一二

光圓寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四・一二・八

戒法寺住職

長谷川岱潤

〒141-0021 品川区上大崎一・九・十一

戸川)が東京湾に流れ込んでいる。

このような地勢の時に江戸に來た、家康は、武蔵野低台地を海寄りから切り崩し、低湿地を埋め、海を埋め、人が住める土地を広げ、東京湾に流れ込む、急峻の流れを変え、川を巧みに利用し、広大な江戸城を囲む、幾重もの運河を造り、巨大な水の都を造成していくのである。この一大都市造成工事を、後に続く、歴代の将軍が継続。有能な家臣団が推進。完成までに、結局、七十年もの歳月を費やす。

大都市、江戸の誕生。

江戸の川(運河を含め)の成立状況。そして、このようにしてできた川を、江戸時代人になって、周りの景観を想像しながら歩く。これが本稿の目的である。

【参考文献】

- 「川と水辺の辞典」鈴木理生 柏書房
- 「江戸の川、東京の川」鈴木理生 井上書院
- 「東京の地理がわかる事典」鈴木理生 日本実業出版社
- 「江戸・東京千年地図帳」菅野俊輔 別冊宝島

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第六十六回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

富豪の社会貢献家アルベル・カーンへの哀訴③



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。才気煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担い、印度学の拠点ドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍らキリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、スイスはバーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表、仏教に造詣が深いオーストリアハンガリー帝国元駐日代理公使クーデンホーフ伯と出会う。また、ヨーロッパ初の比丘ニャーナティロカルの存在を知らされ強い興味を覚える。一方盟友・荻原雲来が博士号取得して帰国。一人異郷に残された海旭はロイマンから博士号取得を促されたところへ母トナ逝去の悲報で気持ちが悪えかけるが、気鋭の仏教学者ヴァレザールと出会い龍樹の『中論』の独語訳を手伝うことで博士論文にも弾みがつき首尾よく博士号を取得。しかし仏門への導きの師・端山海定逝去の報に接し海旭の帰心は消え、宗門からの給付金も打ち切られる。海旭は富豪アルベール・カーンから援助を得るべく、東大教授の姉崎正治に仲介を依頼する書状をしたためるのだった。

ロイマン教授宅に招かれる

渡辺海旭は、フランス人篤志家アルベール・カーンからの資金援助を畏友・姉崎嘲風こと正治に仲介してもらうため、渾身の訴えをしたため終えると、

「姉崎嘲風老兄殿 蘇城（ストラスブルク）に閑居し独り帰東を願う寒僧 拝」

と記してペンをおいた。

書くべきことは書いた。さて、この書状が首尾よく奏功をもたらすか。それはひとえに姉崎が海旭の只ならぬ真剣味をどう受け止めるかにかかっている。あとはひたすら「朗報」を待つだけだった。

しかし、後は天命に委ねると自らに言い聞かせたものの、心中のざわめきを抑えることができない。

事は火急を要するので、手元不如意ながら

も出来たばかりのシベリア鉄道經由の特急便を奮発したが、それでも往復には二、三週間にかかる。そうとわかっていても、翌日から毎日のように郵便受けを覗いている自身の焦燥ぶりが我ながら情けなかった。

相変わらず、ロイマン教授に乞われての研究室詰めがつづいていた。遠くシルクロードから列強の探検隊が競って持ち帰ったサンスクリットの仏教経典の断片の比定という何とも根気のいる作業だが、教授は海旭の仕事ぶりににわかにハカがなくなつたのを感じたらしく、誘いの言葉をかけてきた。

「ワタナベ、どうしたのだ。ここ数日、君はまるで夢遊病者だ。どうだ、妻と一緒に我が家で食事でもせんか」

ワグナーの窮状をわが身に喩える

ロイマン家をたずねると、卓上には夫人の心づくしの料理が並べられていた。いつものように接客の主役は社交的なロイマン夫人だ

った。海旭が席につくと、夫人が明るく声をかけてきた。

「ワタナベ、いよいよ来週はこのオペラハウスで、『ニーベルングの指環』の『神々の黄昏』(Götterdämmerung) が開演されるわ。ドイツ人も顔負けのワグネリアンのあなたとしては、待ち遠しくてしかたなかったでしょう。私もとても楽しみだわ」

海旭は「はあ」と答えただけで、口をつぐんだ。

「あら、どうしたの」と夫人が心配げに海旭の顔を覗き込んだ。「主人もいつていたけれど、何か心配事でもあるの。もしそうなら、聞かせてちょうだい。私たちに何かできるかどうかはわからないけれど、とにかく話せば気分は晴れるはずから」

海旭は、姉崎への手紙で、「ロイマン師にも話していないことを老兄だけに打ち明ける」と思わせぶりに書いた手前、しばし躊躇した。しかし、夫人のおもいやりに背中をお

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価: 12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り)

※寺院名()を入れる・入れない

※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価: 10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。

※消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。

※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。

※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、ご注文をご記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax(03-3578-7036)、メール(hounen@jodo.ne.jp)、または
ご郵送(〒105-0011東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

檀信徒の皆様へ

写経 セット

浄土宗勤行の解説も付いた12枚組

毎日のお経だから
心のこもったオリジナルな
ものがいい。



薄墨手本をなぞる
オリジナルA4判

詠唱会
の皆様へ

写詠歌 セット

浄土宗歌「月影」と春夏秋冬の和歌
解説付き5首セット



詠唱でお唱えする歌、
法然上人のお歌を
筆で写して心に刻もう！

当会オリジナル新商品!!

※ご注文と詳細はウラ面へ

法然上人を心から慕う
法然上人鑽仰会だから
こそ作れる高級奉書の
オリジナル手本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Faxまたはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。